



第 116 号  
北海道ポーランド文化協会 会誌「ポーレ」  
2025.9.1

**10/13 (月・祝)** 中島公園内の豊平館で 定例総会と午後のポエジア を開催します！



写真は昨年の懇親会(10月)&午後のポエジア(8月)から

今年も豊平館の素敵な空間で、定例総会と懇親会兼朗読会「午後のポエジア」を開催します。  
会員及びご縁のある皆様と共に、ポーランド文化に関わる交流の楽しいひとときになれば幸いです。

- ◆ <sup>第 39 回</sup> 定例総会 1F 下の広間 ※本会会員向け、ご出欠は同封のハガキで **〆切: 10月6日(月)**  
 15:30~16:30 総会 ※入館チケットは当会が用意します  
 16:30~17:00 休憩・館内見学 ※17:00 以前の入館/見学は ¥300 自己負担となります

- ◆ <sup>第 14 回</sup> 懇親会兼朗読会「午後のポエジア」 2F 広間 ※入場無料、ドリンク・軽食付 (持ち込み可)  
 ※会員以外の方も誘い合わせてご参加ください  
 ※17:00 以降は入館無料  
 ※写真は本誌や HP, FB で利用します

17:00 開場

17:30 写真撮影

演奏 高橋可奈子 (メゾソプラノ)

朗読会「午後のポエジア」

助成



「午後のポエジア」朗読者を募集します

テーマ自由、朗読時間 5 分前後。朗読のほか、歌、踊り、演奏、映像、  
テーマトークなども歓迎。お問合せは 熊谷敬子 電話 080-4045-1461 へ

20:00 終了予定

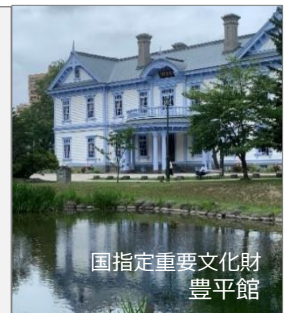


2025. **10.13** (月・祝)

**豊平館**にて  
(中央区中島公園 1-20)

◇定例総会 15:30~

◇懇親・朗読会 17:30~



国指定重要文化財  
豊平館

お問合せ・予約先 : 080-4071-0956 (安藤) hokkaidopolandca@gmail.com

日本での2週間：ブロニスワフ・ピウスツキとアイヌの足跡をたどって  
今年6月、私は初めて日本を訪れました。スレユヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館を代表して、  
当館副館長で日本研究者兼外交官のヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ博士と同行しました。

私たちの目的は、ピウスツキ兄弟に関する展覧会のコンセプトを日本の博物館に提案することで、私たちは兄弟が故郷で生まれた精神的な基盤——ポーランドの独立の立役者となったユゼフと、アイヌ文化の研究者となったブロニスワフを形作った価値観——の物語を伝えたいと考えています。



私たちの旅は、東京、敦賀、松山を経て、ブロニスワフと彼の仕事に結びついた北海道へと続きました。彼の仕事はアイヌの遺産を記録し保存する上で重要な役割を果たしました。札幌では北海道ポーランド文化協会の方々との会合、私は20世紀初頭に祖国独立のために戦ったポーランドの女性たち——ユゼフ・ピウスツキの妻でポーランド社会党の活発な党员、熱心な社会活動家であったアレクサンドラ、および国会議員、女性解放運動の活動家、政治家であったゾフィア・モラチェフスカ——について話しました。二人は当時の現実では並外れた決意と性格の強さを要求される中、公的活動と私生活を両立させたのです。

最も印象深かったのは、平取と白老のアイヌに関する博物館や遺跡への訪問でした。本でしか知らなかった生活用具、衣服、道具を実際に目にし、両館の館長から伺ったお話——この民族の歴史、物質的・精神的遺産、そして自然との深い絆——から、アイヌの記憶が今も生き続け大切に守られていることを感じました。アイヌ文化の多くの証言を眺めながら、リトアニア国立博物館と共同で準備中の展覧会「世界の間にある魂：日本の先住民族アイヌ

とブロニスワフ・ピウスツキ」を想起しました。この展覧会はブロニスワフの誕生160周年を記念して2026年に開催されます。ポーランドで、二風谷アイヌ文化博物館の本物の遺物を展示できることを嬉しく思います。これらの遺物は、アイヌ文化を一般の方々に身近に感じさせ、その保存へのブロニスワフの貢献を強調するでしょう。



私たちは白老の国立アイヌ民族博物館「ウポポイ」にあるブロニスワフ・ピウスツキ記念碑に花を供えて、数世紀にわたりアイヌ文化と深く結びついた北海道での滞在を非常に象徴的な形で締めくくりました。そこでは私の同胞の記憶が鮮明に温かく保存されているのを目にして感動しました。

私は素晴らしい人々との出会いの温かい記憶を胸いっぱいに戻りました。最初の瞬間から、日本のおもてなしの文化に感動しました。私たちに親切にしてくださり、多くの時間を割いて知識と情熱を共有してくださったことに心から感謝します。特に安藤厚教授には、個人的な配慮と北海道での旅程の手配に、また私の旅の仲間であるロドヴィッチ博士にも、心から感謝します。

再度日本を訪れたいと思っています。その機会はきっとあるでしょう。そして、これは私たちの協力関係の始まりにすぎないと思っています。

(マウゴジャータ・バサイ Małgorzata Basaj, スレユヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館展示・普及部長)

実り多く有意義な日本滞在を終え、POLE誌上で北海道ポーランド文化協会のみなさまにご挨拶できることをたいへん嬉しく思います。私たちの博物館のキュレーター兼部長のマウゴジャータ・バサイ氏と共に、私たちは将来の展覧会に向けた重要な仕事に携わることができました。

当館で計画している日本とポーランドの展覧会は、一つはリトアニア・英国・日本との共同企画、もう一つは敦賀市・松山市・白老町との共同企画です。それらについては、友人のマウゴジャータが書いているので、ここでは繰り返さず、その発展についてもう少し詳しくお話しします。

私たちの視察旅行は、ポーランド文化・国家遺産省の「インスピレーション・カルチャー」プログラムの助成金を受けて実施されました。

ポーランド史上の重要人物について日本の観客

や聴衆にどのように伝えるべきか、私たちは長い間考えてきました。

日本では、ピウスツキという名前はサハリンと北海道のアイヌ民族とニヅフ民族の研究に貢献したブロニスワフ(1866-1918)との関連で広く知られています。1903年の彼の滞在を記念して2013年に白老町に建てられた記念碑は、それをよく表しています。しかし、彼の弟で、1918年のポーランド独立の父の一人であるユゼフ(1867-1935)については、歴



史家や専門家以外、知っている人はほとんどいません。とはいえ、二人が生涯を通じて社会正義のために全力を尽くし献身するという理想を体現していたことは特筆すべき点です。

ユゼフは優れた軍司令官、カリスマ的指導者、そして強力な政治家でした。ブロニスワフは比較的穏やかな性格で、暴力が嫌いでした。サハリンの流刑地に滞在中や、1905年の革命期のウラジオストクで、極度の暴力を目にしました。兄弟の行動はリトアニア生まれのポーランド人に典型的な家庭環境と幼少期の教育によるところが大きかったのです。例えば、模範的な人格を持った母親マリアの役割についてお話ししましょう。もう一つのテーマはポーランドのロマン主義と、それが掲げた理想、すなわちポーランド独立への献身です。私たちは今度の展覧会でこの物語を紹介したいと思います。

展覧会は、ポーランドの歴史と関わりの深い日本の各地——人道の港敦賀ムゼウム、(1904～05年に捕虜収容所が設置され数十人のポーランド人兵士が滞在した)松山市の坂の上の雲ミュージアム、そして白老町——で開催したいと思います。現在、この展覧会は2027年春～28年秋に予定しています。

日本滞在中に2種類の講演を行うことができ嬉しく思っています。バサイ氏はポーランド独立運動における女性の役割について、私はピウスツキ兄弟と新渡戸稲造について話しました。新渡戸稲造の物語はポーランドではあまり知られていませんが、彼はユゼフ・ピウスツキ、ロマン・ドモフスキ、イグナツィ・パデレフスキといったポーランドの偉大な政治家たちや、マリア・スクウォドフスカ=キュリーとも会見し、彼らを深く尊敬していました。私はそれについてポーランド語で本を執筆し、この7月に当館から出版しました\*。



今回の滞在中では、ピウスツキ兄弟に関する今後の展覧会の説明だけでなく、2026年にブロニスワフ・ピウスツキ生誕160周年を記念して開催される「アイヌ文化とブロニスワフ・ピウスツキ」展についても触れる機会がありました。この展覧会については、バサイ氏の寄稿で詳しく知ることができます。

安藤厚教授と、以前から深いご縁のある多原良子氏が平取町と白老町を巡る綿密に準備されたツアーに同行してく



ださいました。協会のみなさまはご記憶かと思いますが、彼女は2022年にポーランド・アイヌ『祖霊祭』/シンヌラッパ・ケンネニサツというプロジェクトでアイヌ女性会議「メノコモシモシ」を率いていました。

この旅の前、札幌エルプラザでの北海道ポーランド文化協会主催の講演の後、聴衆のみなさまと非常に有意義な懇談を行うことができました。個人的には元駐日リトアニア大使のアルギルダス・クジス博士にお会いできてとても嬉しかったです。彼は現在、ポーランド・英国・日本共同のアイヌとブロニスワフ・ピウスツキ展の開催にご協力頂いています。

もう一つの素敵な出会いは、ブロニスワフ・ピウスツキにちなんだ新作能を制作されている能楽師の津村禮次郎先生との出会いでした。



全体として、今回の日本旅行は非常に過酷な旅で、ワルシャワー成田ー東京ー敦賀(京都・岡山経由)ー松山ー成田ー札幌ー平取ー白老ー新千歳ー成田ーワルシャワと、飛行機、新幹線、JR特急、車を乗り継いで、本当に大変でしたが、私たちはこの仕事が好きですし、日本や日本人の方々とお会いできることはいつも素晴らしく、刺激的です。

また、すべてのロジスティクスを手配してくださった、開発・国際協力部長の同僚、アンナ・ヴァホヴィアック氏にもたいへん感謝しています。彼女は素晴らしい仕事をしてくれました。

ありがとうございました。またお会いしましょう!  
(ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ Jadwiga Rodowicz-Czechowska, スレユヴェク市のユゼフ・ピウスツキ博物館開発担当副館長、元駐日ポーランド大使) 安藤厚訳



第 116 回例会  
報告



講演&上映 『ポーランドと日本:

新渡戸稲造とポーランドの偉人たち』 6/10

本例会は参加者 45 名 (うち会員 14 名) とたいへん盛況でした。アンケートでは講演:「大変良かった」(5点) 14名、「良かった」(4点) 8名、「ふつう」(3点) 1名、平均 4.6 点、映画: (5点) 17名、(4点) 3名、(3点) 1名、平均 4.8 点とかなりの高評価でした。(安藤厚)

## アンケートにおけるコメントより

- 1: 講演) 長い間、周辺の大国に支配・抑圧された歴史を持つポーランドという国を、今日は女性の活動という視点から改めて学ぶことができました。恩師がワルシャワ大学に留学(短期)された折、同国を訪れる機会を得て国内を旅した日々を思い出しました。その若き日々により深く同国の歴史(東欧の諸国を含めて)を学んでおくべきでしたが、ショパンの音楽の背景にある愛国の思いは受け止めて帰国の途についたことを思い返して今日のお話を聴きました。
- 2: 映画) 改めて彼ピウスツキの人生を追うことができました。もう少し時間をかけて探求したい人物です。これからの協会の活動を期待して居ります。(60歳代)
- 1) 「空飛ぶ大学」の存在を初めて知る。波(ポーランド)史の概説本はどうしてもピウスツキや政治家、政党の話になってしまい、なかなか女性に焦点が当たらない。私にとって貴重な話でした。本題とは別件だが、ヤドヴィガ・ロドヴィッチ元駐日波大使の能について、昔、朝日だか、読売だかで読んだ。実演は無理としても、映像で見られないものか。
- 2) ブロニスワフとチュフサンマの話は知っていても、その孫以後の人々の事は全く知らなかった。なんか頼もしく思う。彼はザコパネにも足跡を残している… 知ることが増えた映画でした。只、白黒画像の字幕は読みづらい… 読めなかった。(70歳代)
- 1) 新渡戸とポーランドとの関係については全く知りませんでした。大変興味深く聞きました。女性が独立運動で活動したことが興味深かったです。「空飛ぶ大学」のことも初めて知りました。
- 2) 大変おもしろい内容でした。多くの人に見てほしいと思いました。ありがとうございました。(60歳代)
- 1) ポーランドという国・国民は、不屈の精神で生き抜いてきたのですね。
- 2) ブロニスワフの人生に驚きと共感しました。ポーランド映画でここまでアイヌ民族の生きた世界を再現したのは素晴らしいと思いました。(70歳代)
- 1) 19~20世紀に掛けてアレクサンドラ・ピウスツカやゾフィア・モラチェフスカが積極的にポーランドの独立活動に実質的に関わっていたことを、はずかしながら初めて知りました。大変興味深く拝聴させて頂きました。また、これらの女性の活動が現在のポーランドの女性活動においても、何らかの形で継承されているか、ちょっと興味が起きました。貴重なお話ありがとうございました。
- 2) ブロニスワフ・ピウスツキ兄弟についての概要が端的にまとめられた素晴らしいドキュメンタリーだと思

います。ピウスツキ兄弟の日本についての関わりも大変興味深く思え、日本とポーランドとのつながりも、将来的にも継続されてゆくべきものと改めて考えさせられました。素晴らしいドキュメンタリーの上映ありがとうございました。(60歳代)

- 1) 大変勉強になりました。知らない事がたくさんありました。



キュリー夫人が「空飛ぶ大学」で勉強したのをはじめて知りました。ポーランドの女性の向上、社会参加など、とても苦勞し戦いぬいたのですね。詳しく知る事が出来たいへん良かったです。

- 2) (ウポポイで貴協会によるご紹介で本イベントについて知りました) ブロニスワフ・ピウスツキ氏のリサーチを行っております。彼の人生、アイヌの人々との交わりの根底が理解できました。ありがとうございました。ブロニスワフが樺太を離れざるを得なかった理由が解りました。大いなる民族学者です。ニシパ!! (80歳代、能楽師)

- 1) 独立に賭ける思いと重ねての蜂起を支えたものは何なのか。その過程の中で女性の社会的参加が実現されていることは(できればもう少し時間がほしかった) 初めて知ることばかりで驚かされました。ポーランド独立軍のことは少し読んでおりましたが、女性解放の動向は初めて聞くことでした。(70歳代)

- 1) 新渡戸の功績をもっと知りたいと思った。ポーランドにおける女性の社会進出の経緯を知ることで、今日のポーランドをもっと深く理解することができるのではと思ったところです。

- 2) ブロニスワフの生きざまをもっと多くの日本人に知ってもらいたい。(50歳代)

- 1) 新渡戸稲造と日本とポーランドの独立運動家の関わりと、ポーランドの独立運動の中で女性解放が欧州でも先駆的な事になっていた事を知ることが出来てとても良かった。

- 2) 映画で見て、人物像、心情、生涯、業績、現代へのつながりをしっかりと実感できた。サハリンを去った後も業績があった事も知ることができて良かった。(50歳代)

- 1) 資料があり理解の助けとなったが、内容が多く全て理解するのが大変だった(特に2つめの講演)。

- 2) 参加でき、この映画を見る事ができ大変よかったです。ピウスツキという偉大な人物を知ることができ、良かったです。(70歳代)

- 2) ピウスツキ・ブロニスワフについて勉強します。(70歳代)

- 2) 大変貴重な映画で感激しました。ありがとうございました。(60歳代)

1) 日本とポーランドの歴史的つながりが、国家レベルであった事を初めて知ることが出来ました。(70歳代)

1) ウィーン会議後の分割ラインが示されればよりよくわかったと思う。(60歳代)

1) とても興味深い内容でした。

2) 貴重な知識を得ることができました。(40歳代)

1) 普通なら知ることのできないポーランドの歴史、日本とのつながりについて、お話を聞くことができて良かったです。

2) アイヌ文化の広まりがポーランド出身の人物と関わりがあるとは全く知りませんでした。とても勉強になりました。どうもありがとうございました。(20歳代)

1) 講演1, (….) 2ともに、配布資料をいただけるのであれば、読みあげは短縮してもよいのではと思います。(50歳代)

1) ポーランド人のロドヴィッチさんが新渡戸稲造を研究していらっしゃるのに驚くと共に、新渡戸の著作『東西相触れ』と『偉人群像』のポーランドに関する章をポーランド語に翻訳されたり、説明を加えたり、また新渡戸とポーランド文化人との交流関係を本にすべく執筆中とのことと尊敬いたします。ポーランドの歴史は苦難の歴史ですが興味深いです。

バサイさんが話してくださった、ポーランドの国の独立と女性の地位向上には女性たちが勇気を持って闘ったという背景があるというお話、ポーランドの女性は強いですね。マリア・ピウスツカの模範、アレクサンドラ・ピウスツカ、ゾフィア・モラチェフスカの活躍、キュリー夫人も含め、後者三人が「空飛ぶ

大学」で学んでいたことに感動です。

2) ピウスツキ兄弟の物語、兄弟愛、また兄のプロニスワフの運命はきびしいものだったが、行かされた場所で自分の使命は「他人の役に立つこと」と悟り、アイヌの人々に対して命をかけて助け、研究もし、教えたということに感銘を受けました。

この内容は川越宗一氏の『熱源』(直木賞)にほぼ同じように書かれてありました。私はこの本に感動し、このように苦しみながら愛し続けたポーランドのプロニスワフを尊敬します。ぜひ、この映画を川越宗一氏に紹介してほしいです。アイヌの方も川越宗一さんの『熱源』をお読みになるといいのになあと思いました。プロニスワフが東京に来ていたこと、お孫さんもいたことなどは知りませんでした。今日は新しいことをたくさん学びました。また、新渡戸の資料を配布させて下さり感謝です。(70歳代)

#### 新渡戸遠友リビングラボ NELL プロジェクトにご支援を

1894(明治27)年から50年間続いた札幌遠友夜学校(新渡戸夫妻創設、札幌農学校(のち北大)の学生たち7百人が無償で地域の貧しい子どもたち5千人以上に博愛の精神で教えた学び舎)のあった現新渡戸稲造記念公園(札幌市中央区南4東4)に、誰もが(特に子ども、若者が)気軽に学び実践できる建物を、できれば2026年竣工で建築予定です。皆様のご支援をお願いいたします。詳細は WEB サイト参照 <https://nitobe-enyu.org/> お問い合わせは NELL 事務局 [info@nitobe-enyu.org](mailto:info@nitobe-enyu.org) (三上節子)へ

## ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」を慕って 門間 巖

2014年、全国で活躍しているポーランド・ダンスの団体代表が集結し「日本・ポーランド民族舞踊友好協会」が発足しました。北海道では北海道ポーランド民族舞踊研究会「Do」が活動しています。毎年全国持ち回りで「ポーランドの祭典」を開催し、民族衣装をまといポーランドの踊りを楽しんでいます。

### 「シロンスク」京都公演とワークショップ 2025

スタニスワフ・ハディナ記念ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」は1953年に設立され、本拠地はシロンスク県のコシェンチン村の宮殿にあります。創始者のハディナ氏とは生前二度お会いすることができました。私事ですが、2016年には同舞踊団より「メシアシレジナ賞」とブロンズ像をいただきました。シロンスク舞踊団は2002年に初来日以来、何度も来日して各地で公演し、私たちはその後も継続して指導を受けています。

当協会とは2019年の来日時に公演・ワークショップで交流、夜の交歓会は大いに盛り上がりました。その後コロナ禍を挟んで、2021年6月に「パートナーシップ」協定を結び、毎年のように来日公演があり、計6名の若者が本拠地でレッスンを受けました。

今回は当協会主催で、3月15日に京都でシロンスク舞踊団の公演とワークショップを行いました。公演「フォーク・ヘリテージ」(民族遺産)プロジェクトは、ポーランド音楽の歴史における民族文化のインスピレーションの紹介が目的で、2024~25年にポーランド文化・国家遺産省の助成を受けています。

「シロンスク」の舞台はポーランドの民族文化とその普遍性を表現しています。有名なシロンスク地方の民謡「シュワ・ジェヴェチカ」(森へ行きましょう)は公演のたびに観客の心を捉えます。

午前の公演はホールがほぼ満席で、まず京都大学民族舞踊研究会の現役学生・OBOG がポーランドで習った躍動感ある「オベレック」を見事に踊りました。彼らは舞踊団本拠地での本格的なワークショップや現地公演鑑賞などで充実した日々を過ごしてきました。

続いて静かな舞台にショパンのピアノが響き、舞踊団のコンテンポラリーダンスの幻想的な輝きです。ダンサーが静かに回転する足音さえ聞こえる流れで、ショパンの繊細なピアノの音とシャープなダンスが見事に融合し新しい世界を見せました。

後半の民族舞踊は、新たな編曲が加えられた「ポロネーズ・マズール」から、色鮮やかな衣装と共に次々と踊りが続き、交互に繰り広げられる6名による歌声は豊かな声量で観客の心を魅了しました。



京都公演の会場風景

午後のワークショップは2会場とも満杯の参加者で熱気が溢れていました。第一会場はクヤヴィアク、ワルツ、ポロネーズでの踊りで、参加者は8歳の少女から大人まで。豊富な知識と経験に裏打ちされた分かりやすい講習でした。

第二会場のオベレックは大ホールのステージでレッスンの様子を見学できました。朝から夕方まで目一杯舞踊団と共に過ごした贅沢な一日でした。

「パートナーシップ」協定による若手育成と文化交流の事業は2023年に続き2度目で、ポーランドの踊りを愛する若者の育成は私たちの大きな目標、希望です。彼らを温かく受け入れてくれるシロンスク舞踊団に感謝すると共に、今後も双方にとって意義のある交流を続けて行きたいと願っています。

### 大阪・関西 EXPO

4月から夢洲で開催されている大阪・関西万博には、私たちがポーランド館に招待されて数々の展示物に圧倒されました。

5月3日はポーランドでも日本と同じ憲法記念日で、ポーランドパピリオン前で式典がありました。館長の挨拶で始まり、シロンスク舞踊団の「ポロネーズ・マズール」に続き、当協会メンバーも26名で「ポロネーズ・タデウシュ」を踊りました。沢山の皆様様に囲まれ晴れのステージでした。

踊りの後、シロンスク舞踊団、岐阜県恵那市から参加の小中学生も加わり、みんなでパピリオン前から「ユネスコ



パピリオン前から大屋根へパレード

の無形文化遺産」に登録された「ポロネーズ」の音楽に乗って会場内をパレード。目の前のエスカレーターでポーランド国旗を振りながら大屋根リングへと続く大行列は圧巻でした。記念撮影があちこちでパチリパチリ。

夜は万博ステージへ移動、期待いっぱいのシロンスク舞踊団公演で、私たちは最前列で鑑賞。3人の踊り手で始まる上シロンスク地方発祥の「トロヤーク」にはいつも心が奪われます。歌と踊りにパワフルな夜のパフォーマンスのあと、最後に感動のサプライズが待っていました。



夜のシロンスク舞踊団公演

中島みゆきの「時代」のメロディーに乗せて「今はこんなに悲しくて 涙も枯れ果てて…」と日本語で歌う女性シンガーに続き、団員全員がステージに勢ぞろいして歌うのを聞いて、観客全員が総立ちで拍手の渦となり、永遠に心に刻まれ、今でもこの瞬間が目に浮かびます。

当日の入場者は10万人!! 人気パピリオンは大行列で、私たちが各パピリオンを見て回ることはできませんでしたが、大屋根リングに上がり会場全体を夜空と共に味わい、かけがえの無い素晴らしい人生の1ページでした。

私たちが、ポーランドの踊りを楽しむことができるのもポーランドを愛する



ポーランド館前で記念写真

皆さんのおかげです。有難うございました。

(もんま・いわお、日本・ポーランド民族舞踊友好協会会長、仙台市)

第 115 回例会  
報告

ポーランド名作映画ビデオ鑑賞

## 『水の中のナイフ』 5/8



本例会は参加者 26 名（うち会員 11 名）と盛況だった。反省点として、パワーポイントの不調などで上映後の進行に課題を残した。アンケートでは「大変良かった」（5 点）5 名、「良かった」（4 点）4 名、平均 4.6 点とかなりの高評価だった。今後の上映希望作品としては（最近 3 回分の集計で）『デカローグ』『世代』『トリコロール 青の愛』『私は決して泣かない』『戦場のピアニスト』などが挙げられた。（池田光良）

ロマン・ポランスキの最初の長編映画『水の中のナイフ』（1962）はカヴァレロヴィチ監督の『尼僧ヨアンナ』のちょうど一年後に公開され、その「コスモポリタンの」で非政治的な性格が政府指導部と映画関係当局の忌諱に触れた。ポーランド統一労働者党第一書記ヴワディスワフ・ゴムウカは1963年8月の中央委員会総会で公式にこの映画を批判した。

『夜行列車』におけるカヴァレロヴィチ同様、ポランスキもまたスリラー映画の要素を取り入れ、政治的/社会的な問題設定は避け、共産政権が芸術作品から期待するお決まりの要素は無視している。この映画の西側での成功（ポーランド映画として初めてアカデミー賞にノミネートなど）は、ポーランド国内では不信の念をもって受け止められ、作者に対する反感を強めただけだった。ポーランドの評論家の多くはポランスキの人柄や伝説的な私生活を念頭に、色眼鏡を通してこの映画を見た。西側でも彼の以後の作品の評論ではその見方が踏襲されている。

ポランスキは、初期には有名な『ダンスと二人の男』（1958）など超現実的でグロテスクな映画を手がけたが、『水の中のナイフ』では「厳格なまでに知的で周到に構成された、形式主義的といってもいい」映画をつくらうとした。自伝『ロマン』での回想によれば、それは純粹のスリラー映画として作り始められた——二人の男女が小さなヨットに一人の男を乗せ、その男が謎めいた状況下で姿を消すのだ。

物語は狭い空間内で敵対する人物間の相克を描いている。本作はルネ・クレマン監督の『太陽がいっぱい』（1960）に似ている。二人の男と一人の女、階級差、鬱屈した身上、ヨットの上、ニーノ・ロータの哀愁を帯びたテーマ音楽などの共通点があり、ポランスキはクシシュトフ・コメダ（1931-69）のモダン・ジャズを用いて新しい感覚をもたらしている。

参考文献：ポーランド映画史、マルク・ハルトフ著、西野常夫、渡辺克義訳、凱風社、2006  
（坂尻昌平、映画研究者、札幌大谷大学非常勤講師）

## アンケートにおけるコメントより（抜粋）

- ✓ ポランスキの映画は、何本も観ていますが、『水の中のナイフ』は観る機会がありませんでした。ヌーヴェル・ヴァーグをポーランドで先取りしたような、なかなか興味を覚える感覚を味わいました。当時の東欧で、こんな素晴らしい映画を創っていたとは驚きでした。『青春残酷物語』『太陽がいっぱい』と重なり、観ていました。（80歳代）
- ✓ 45年くらい前、学生時代に観た映画ですが、今観るとまた学生時代とは違った感想になりました。閉塞されたヨットは正にその当時のソ連型共産国ポーランドそのもので、特権階級の夫婦と民衆である青年。青年の持つナイフは権力に対する武器であり、民衆が武器を取るのを嫌った権力側である夫はナイフを水の中に落とす。更に青年も水に落すが、武器のない青年（民衆）は自力でヨット（ポーランド）に戻る。民衆を圧迫した権力は警察へ行く（正義への道）かどうか迷っている。そんな風に観えました。もう一回じっくり観てみたい映画です。（60歳代）
- ✓ 何十年振りくらいで再見。何度も見たけれど、やはりあざやか。ただ私はポランスキの熱心な見者ではないから、そう多くは見えていない。ハリウッドでの作はともかく、若い頃の作（60年代の作（…）未見）をやってもらえると有難い。20代の頃見た時はヨット用語もまだ知らず、シート（ロープ）の扱い方も知らなかったの、当然ヨットの動きも得心出来ずに見ていたけれど、ヨットの扱いがわかる現在はより我が事に思えて見た。男性の感想、当時のポーランド社会の寓意というのは、深く読んだものだと感じ。クシシュトフ・コメダの名はよく見るが、まとめて聴いたことがない。そんな機会があればいいのに。モニューシュコやショパンだけじゃないと改めて思う。（70歳代）
- ✓ ヨットで男女3人といえば『太陽がいっぱい』やそのリメイク『リプリー』を思い出したが、湖の上という密室の様な状況での3人の会話、行動等に緊張が切れる事なく楽しめた。ただ、若者役の人があまり若くは見えなかったのが残念。（60歳代）
- ✓ 音楽のジャズが当時としては現代的だと感じました。青年と夫が性格もすべて違って、頭でっかちの夫と生き抜く力のある青年が対称的。若妻が青年にひかれる気持ちわかります。（70歳代）



## エロシェンコ、エスペラント、ポーランド



かつて、ある友人から「エロシェンコが札幌を訪問した」というのは誤りではないか」と問い合わせがあった。調べてみると、それはポーランドのシベリア孤児救済のための慈善コンサートを日本各地で開催したマンドリン奏者「イアン・コバリスキー」であると判明した。この初めて聞く人物について調べる中で、北海道ポーランド文化協会や安藤会長と出会い、埼玉大学の澤田和彦教授からも貴重な資料をいただいた。それが、機関誌『POLE』103号(2021.5)への投稿へと繋がり、資料提供や校正で大変お世話になった安藤会長のお人柄と機関誌『POLE』の多岐にわたる分野とレベルの高い記事や投稿に魅了され会員となることにした。

私のポーランドとの関わりはエスペラントの学習から始まる。筑波大学附属視覚特別支援学校を退職する間際、新宿中村屋でウクライナ出身の盲人作家ワシリー・エロシェンコの生誕120周年記念の小さな集いがあった。エロシェンコはかつてこの学校の前身である東京盲学校に留学し、日本の盲人社会にエスペラントを紹介し広める重要な役割を果たした。彼の人生に惹かれ、深く知るためにはエスペラントの学習が必須だと思い、退職後に集中的に学習を開始した。

独習ではなかなか上達しなかったので、中国の海南大学で行われた1か月の集中講座に参加した。お陰で中級レベルに近い読解力と会話力を習得できた。その後、ドイツやフランスでの2週間講座を経て、ポーランドのポズナンで開催されたエスペラント指導者講習会に2度参加した。

アダム・ミツキェヴィチ大学で2週間にわたり、言語学、教授法、文学など多岐にわたる講義や演習がすべてエスペラントで行われた。また、この時にビドゴシュチュ、トルン、ヴロツワフ、ワルシャワへの小旅行も楽しみ、更にピウスツキのアイヌの蠟管を保管していた A.M.マイエヴィチ教授の自宅兼研究室の訪問も実現できた。

これらの活動を経て、エロシェンコがらみで冒頭に書いたような北海道ポーランド文化協会とのご縁ができた。これからも『POLE』を読むのが楽しみだ。

(引田秋生、(社福)視覚障害者支援総合センター理事長、東京都、2024年9月入会)

## そばかす先生のふしぎな学校



入会のきっかけ:2023年1月に安藤先生がポーランド児童文学『クレクス先生のふしぎな学校』の小椋彩さんによる新訳の発売を Facebook で紹介されました。幼少の頃の愛読書であるとコメントしたところ、2月にその本の書評を書いてみませんかとお誘いを頂きました。私の専門は人間工学や自動認識、制御などで、文学は全くの専門外ですので、当初はご遠慮申し上げたのですが、児童文学で、むしろ一般向けにわかり易い内容でよいのでと心強いお言葉を頂き、お引き受けしました。それがポーランド文化協会と会誌 POLE との出会いで、午後のポエジアなど詩を朗読する素敵な定例会やアイヌ研究のブロニスワフ・ピウスツキの活動を知りました。

ポーランドとのなれ初め:小学校の頃(1970年?)に読んだ『そばかす先生の不思議な学校 Academia Pana Kreksa』ヤン・ブジェフバ Jan Brzechwa 著、ヤン・マルチン・シャンツェル J.M. Szancer 挿絵、内田莉莎子訳です。アンデルセンやいろんな童話とつながっている不思議な物語で、想像力の豊かさ、変わった人? の持つ不思議で奥深い感覚を子ども心に宿すことができたのはこの本のおかげです。なかでもシャンツェルの挿絵は、英独仏ともロシアの絵本とも違う独特のタッチで物語の世界を豊かに表現していました。それから50年以上経ってこの本の書評を書く機会を頂き大変感謝しています。小椋さんの背景を調べ原作の忠実な再現に取り組んだ訳と、内田さんの訳を読み比べてとても楽しい時間を過ごさせて頂きました。

ポーランドとの関わり:1988年夏に3か月、ポーランド日本情報工科大学 PJATK: Polsko-Japońska Akademia Technik Komputerowych(当時 PJWSK)の立ち上げに茨城大学から JICA 短期専門家として出向しました。当初はポーランド語を全く知らず、スクレセチコツキの文字や数字の3の発音などに四苦八苦。街の本屋でポーランド=英語の学習書を探して独学、現地スタッフと少し会話ができるようになって、打ち解けて話してもらえたことが楽しい思い出です。

私のパートナーはポーランド人(後年ドイツで出会いました)で、出身のオルシュティン近郊の実家を訪ねたとき、義父がこの人自身はあまり好きではないが日本と関係があるからと、ポーランド共和国建国の父ユゼフ・ピウスツキの肖像画を家に飾って見せてくれました。当時は政治的な関係しか知りませんでしたが、アイヌ研究のブロニスワフ・ピウスツキの弟でもあったのですね。

現在は大学をリタイアし、茨城県ひたちなか市(ネモフィラの丘で有名)在住、北海道での詩の朗読会へ直接の参加は難しいですが、会誌を通じて色んな活動や歴史に近づけたらうれしいです。今後ともよろしく願いいたします。

(住谷秀保、茨城大学工学部元教員、2025年2月入会)

## 「若きポーランド」の息吹 田村 和子

岩手県での田舎暮らしにピリオドを打ち、大阪府高槻市で暮らし始めて3年8カ月が過ぎました。夏の高温多湿に辟易し、住まいの周囲に緑が少ないこと、冬になっても雪が降らないことに寂しさを覚える日々ですが、もちろん良いこともあります。それは京都と大阪に近いことで、さまざまな文化に触れる機会が増えたのです。3月25日から6月29日までは京都国立近代美術館で「若きポーランド 色彩と魂の詩 1890-1918」\*展が開催され、身近でポーランドを、クラクフを感じることができました。

ポーランドがロシア、オーストリア、プロイセンに分割占領されて国を失っていた時代にクラクフで生まれたのが「若きポーランド」と呼ばれる芸術運動でした。美術の分野では当時の西欧美術や日本美術の影響を受けながら、ポーランドの歴史、伝統、風景、人物をモチーフに象徴的に描かれた作品が多いのが特徴です。

### マテイコ

まずはポーランドの歴史画家として有名なヤン・



マテイコの『スタンチク』が目を引きました。宮廷道化師スタンチクの苦悶の表情が見る者の胸をも苦しくさせ、何が彼をそうさせているかに思いを馳せます。

マテイコがテーマにしたのは祖国愛でした。

### マルチェフスキ

マテイコの教え子の一人で、師から祖国を思う心を引き継ぎながらも若い世代の目覚めを告げたヤ



ツェク・マルチェフスキの作品からも目が離せなくなりました。代表作の『画家の靈感』にはキャンバスをはさんで額に手を当てて悩んでいる画家と美しい女性が描かれています。女性の服はぼろぼろ、藁でできた冠を頭からぶら下げ、足には枷がはめられています。その表情は厳しく、前方を見据えています。この女性は女神ポロニアで、祖国の現状を憂えています。

### ボズナンスカ

当時、女性が絵を学び描くことは難しかった時代です。そんな中、数少ない女性画家として活躍したオルガ・ボズナンスカの作品にも親しみを覚えました。『菊を抱く少女』の目には



可愛いだけでは済まされない不思議な表情があります。その悲しげにも見える目は何を訴えているのでしょうか。ボズナンスカは日本美術に大きな関心を寄せ、作品に反映させた画家でもありました。

### ヴィスピャンスキ

そしてマルチアーティストとして活躍したスタニスワフ・ヴィスピャンスキの『夜明けのプランティ公園』。ヴァヴェル城を前にしたプランティ公園はわたしもクラクフ滞在中に足しげく歩いた所で、まるで故郷を目にしたかのような懐かしさを覚えました。青色と茶色が目立つ色調が郷愁をそそります。ただ、ヴィスピャンスキのパステル画がなかったことは残念でした。輸送面に困難が伴うためだそうです。

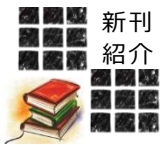


他にも多数の画家の作品が並び、約9割が日本初公開でした。「若きポーランド」の芸術運動は農村地域に伝わる文化や伝統も大事にしました。絵画だけではなく伝統デザインを取り入れたキリム、衣服、刺繍、レース、そして椅子や棚などの木工作品も展示されていたのは嬉しいことでした。

家族とともに初めて一年間クラクフに滞在し、小学生の二人の娘が現地の小学校に通った46年前、わたしがいたく感激したことがあります。現地の学校では小遠足と称してしばしば美術館、劇場、映画館に子どもたちを連れ出し、様々な文化・芸術に触れさせていました。当時の日本の学校ではそんなイベントは少なく、子どもたちがたまたま触れる内容は決まって子ども用の音楽会であり、子ども向けの演劇であり、映画でした。それがポーランドの学校では子ども向けに限らず、本物に触れさせる姿勢が強く見られたのです。

日本では近年、ポーランド文化を紹介する機会が増えてきました。子どもたちにもそんな場を与えたいものです。

(たむら・かずこ、ポーランド児童文学翻訳者)



新刊  
紹介

## 『若きポーランド 手がかり』

関口 時正 (著)

未知谷 2025.4

本書からは、1880～1910年代にかけて、ポーランド文化が転換期を迎え、新しい文化が芽生え、伝統文化に新たな色彩が加わり成熟を深めた、ポーランド文化の爛熟期ともいえる「若きポーランド」と呼ばれる時代における、約30年にわたるポーランド文化の豊かな熟成と膨らみを感じ取ることができる。

この本は、長年にわたりポーランド文学作品の日本への普及に力を尽くされ、その功績により数々の賞や勲章を授けられ、本年3月には文化功労章「グロリア・アルティス」金メダルを受章された関口時正氏により、詳細かつ鮮やかに描き出されている。

「若きポーランド」(Młoda Polska: ムウォダ・ポルスカ)の時代は、ポーランドの芸術家たちがそれまでの文化的伝統や束縛から解放され自由の気運の大きな高まりをみせた時期であり、広く絵画や音楽、演劇、詩作の世界において芸術家たちの自由と解放の精神の高揚する気風が各作品の作風や技法にまで色濃く反映された。ポーランドの文化・芸術に斬新かつ革新的な息吹が漲っていたこの時代には、パリやベルリンなど国外からアールヌーヴォーなど新しい芸術運動の息吹がポーランドにもたらされた。

特筆すべきは、「若きポーランド」と同時代の明治期の日本文化がヨーロッパに与えた強い影響(ジャポニズム)が「若きポーランド」の重要な担い手の一人、スタニスワフ・ヴィスピャンスキの画風にもインスピレーションを与え、1901年にはワルシャワとクラクフでヤシェンスキ蔵日本展が開催され、当時の日本文化がポーランドに新たに生まれつつあった創造活動に独特の息吹を吹き込んだという事実である。

タイトルに『若きポーランド 手がかり』とある通

り、本書には「若きポーランド」時代を紐解くための**手がかり**がいくつも散りばめられている——近現代のポーランド文化の広汎な分野の成熟と爛熟を、音楽、美術、演劇、詩作などに携わる芸術家とその人生、作風を基本軸としつつ、「若きポーランド」の時代と、この時代の形成を担った芸術家たちに影響を与え、時に彼らの心身の拠り所となったさまざまな**ポーランドの土地**(「若きポーランド」誕生の地**クラクフ**、ポーランド屈指の避暑地、保養地であり、その豊かな自然が多くの芸術家の心身の拠り所、想像と創造の源泉となったポーランド南部の山岳地帯(**タトラ山脈**、**ザコパネ**や**ポトハレ地方**)、その他「若きポーランド」時代の担い手である詩人や画家たちの作品のモチーフとなった**国外の土地**(**ウクライナ**や**シベリア**)など、である。

近現代のポーランド文化の成熟・爛熟期である「若きポーランド」を、その時代を担い形作った芸術家たちの横顔や彼らの生み出した作品の群像をタテ軸に、それと同時代のポーランド国内外における歴史的、民族的、文化的側面の描写をヨコ軸にして多面的・多角的に詳述し、このダイナミックに激動する文芸勃興とその華やかな開花を、この時代に爛熟した水彩画やパステル画のように色彩豊かに描写して強く印象に残る一冊である。

(小池敏大、会員、岐阜県高山市)



若きポーランド  
手がかり

関口時正

### 〈新刊紹介〉

## 『クラクフ・ゲッターの薬局』

タデウシュ・パンキェヴィチ (著) 田村 和子 (訳)

大月書店 2024.11

クラクフの薬局は現代における美容室のような癒しの場であったのかもしれない。戦火に包まれた日常において、そこには一種の「フォーマット化された戦争の在り方」が垣間見える。政治が孕む恐怖と民族の再興——それこそがこの本が伝えようとする記録的意義なのではないかと感じた。

『クラクフの薬局』を読むにあたり、多方面からご指導をいただき、改めて映画『シンドラーのリスト』やシベリア抑留についても学んだ。どの作品にも共通しているのは、「記録することの責務」である。

この書の著者もまた、巻頭においてその動機を明確に宣言している。私たちは、忘れ去られつつある事実と向き合う努力を怠ってはならない。

ゲッター内の薬局に描かれるのは、**民族的アイ**



デンティティとレイシズムの構図である。特に注目すべきは、これが現代日本とも共通する部分を持っている点だ。過疎化が進む日本では、地域の文化や習慣が今後ますます重要視されるだろう。ゲットー内でも、ユダヤ人としての誇りや、終戦への希望が描かれている。

薬局に集う裁判官や大学教授、弁護士たちは、ポーランド語からヘブライ語への転換を求められる。言語は民族の象徴であり、また、ユダヤの食文化に対するゲシュタポの統制は民族の存続そのものを脅かすものだった。これは、日本の先住民であるアイヌや、琉球民族が直面した状況とも共鳴する。人は誰しも「還る場所」を必要としている。薬を買うという行為すら、支配下における「魂の取得」に繋がっているように感じられた。

シベリア抑留やアイヌ民族の問題でも、国家運営の論理的枠組みによって、共通の統制手段がとられていたことが本書からも読み取れる。人工知能における言語処理モデルに例えるならば、シベリア抑留、アイヌ民族、現代日本人といった「パラメータ」によって出力される「論理的結果」が、政治的誘導の手段として用いられているとも言える。

しかし、そこに一筋の救いがある。人種や国境を越えた人道的博愛——シンドラー、杉原千畝、樋口季一郎のような存在こそが、民族を救う鍵である。だからこそ、生き延びた者たちは記録する責務を背負っている。この本は、まさにその証言であり、記録である。

巻末に記された詩人イグナツィ・ニコロヴィチの詩はそれを象徴している。

「あなたは言う、  
かつてゲットーにあった、あの『鷲』薬局は  
世界に二つとない稀有な薬局だったと。〈…〉  
細菌よりもずっと野蛮だった敵、〈…〉  
戦わなければなりませんでした  
日々、命を賭けて」

すべては民族と国家の再興を願う戦いだったのだ。それは現代の日本においても通じるテーマである。私たちはこの良著から民族の誇りを学ばなければならない。日本の心を守り抜くために——そう強く感じた。  
(小篠真琴、詩人、会員)

〈新刊紹介〉

『ソラリス Solaris』

スタニスワフ・レム (原作) 森泉 岳土 (著) (2巻)  
ハヤカワ・コミックス 2025.1



ソ連時代を代表するSF作家ストルガツキイ兄弟の弟ボリスは、かつてインタビューの中で、読者がリアリズムの小説を読む時と同様に幻想的な作品の世界に自然と入りこむためには、レムが『ソラリス』のミモイドの詳細な描写や説明に多くの紙幅を費やしたように、ディテールへの細心の注意が必要なのだと述べた。

森泉の描くコミックスで読者を圧倒するのは、まさしくそのミモイドを初めとした惑星ソラリスの海に出現する多種多様な形成物の細密かつ大胆な描写である。ミモイドは、周囲に存在するものの形を模倣し、それに擬態した形状を生み出すもので、雲や飛行機も模倣するが、人間には全く反応しない。大変恥ずかしながら、この本で「ミモイドとは実はこんな形状だったのか!」と驚きのあまり目をみはってしまった。ミモイドに続く「対称体」「非対称体」と称される形成物の生成と崩壊の描写も、このコミックス中の白眉であろう。

『ソラリス』は人類とは全く異なる知性とのコンタクトをテーマとしている。ソラリスの海は人間の抑圧された記憶に何らかの形で接触し、10年前に自殺した恋人を主人公の前に出現させる。その目的はわからない。この「残酷な奇跡」に登場人物は翻弄

される。このようなプロットは精神分析やシュールレアリスムの芸術と非常に親和性が高い。自分のことさえもわからないのに、どのようにして人類以外とのコンタクトが可能となるのだろうか。未知は鏡のように自分の姿を写し出す。SF的設定の中で登場人物はきわめて不安定な心理状態に置かれている。

ソラリスの海のみもイド等の描写は、精密でありながら日常性とは異質な造形となっており、シュールレアリスムの絵画を思わせる。これらは絶対的な他者の表象である。それが下巻の129頁以降、主人公の見る悪夢の場面では鮮やかに反転される。自らに伸びてくる触手が、自分の前に目や頬や口を作り出し、無から女性らしき姿が生み出されるのだ。自己から他者が生み出され対面するのである。

しかし、その像も安定はせず、たちまち自分もろとも目の像も飛び散り、無限の中に拡散し、主人

公はいつそのこと死による終末を望む。夢というシュールリアリズムが好んだ舞台を借用して細かな点描で生み出されたイメージが、ソラリスの海が生み出すミモイド等と重なり合い、鮮烈で見事だ。

レムは人類という生命体の特権視することはなかった。また曖昧な神秘主義に陥らず、サイエンス・フィクションとしての正確性に執着した。このような厳格な認識がもたらす緊張感、小説では執拗なまでの観察や論理となって現れている。海が生み出した4mの子どもの体の動きが不自然だったと過去の探検隊の隊員が説明する場面がある。小説では、言葉と論理を尽くしてその不自然さが正確に

伝えられており、レムの本領が発揮されている。この名場面に、コミックスではわずかに2分で挑んでいる。小説とコミックスの対決とも呼ぶべき瞬間である。

地球の現実を超えるような事物が取り扱われているが、レムは戦争の時代を生きた人物であった。海が生み出した「対称体」が崩壊を前にキノコ雲となり、その残骸が廃墟のような姿をさらすところはコミックスでもとらえられている。

分断と排除と戦火が世界各地で再び深まっている現在、迫真の筆致でレムの世界に挑んだこのコミックスをぜひ手に取っていただきたい。

(宮風耕治、ロシアSF翻訳家、大阪市)



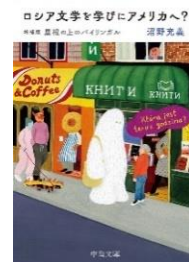
新刊  
紹介

## 『ロシア文学を学びにアメリカへ？』

増補版 屋根の上のバイリンガル』

沼野 充義 (著)

中公文庫 2025.1, 白水社 1996.3, 筑摩書房 1988.4



『屋根の上のバイリンガル』として1988年に初版刊行。今回「はじめに」「ハーバード生活から、三つのエピソード(あとがき)」といくつかの章へ「中公文庫版への付記」を書き下ろした増補版

今、トランプ大統領によって、ハーバード大学に留学する外国人に入国を制限することになり、日本からの留学生も他の大学への変更を余儀なくされています。

著者の沼野充義さんはロシア文学専攻でありながら米国のハーバード大学に留学し、学内だけにとどまらず東欧系移民や亡命作家たちとの交流から得た豊かな体験談を起点に、亡命者・移民・多言語話者の文学や言葉を縦横に考察しています。

移民の言語事情やイディッシュ語など、ときに複雑なテーマを扱っているのに著者のユーモアで、難しい話題が丁寧かつ、読みやすく解き明かされます。21世紀のいまこそ改めて読むべきテーマであり、ロシア(スラヴ)界隈に興味があってもなくても得るものはとても大きいと思います。かつては「バイリンガル」そのもののイメージや社会評価がそれほど肯定的ではなかったということも初めて知りました。

著者は、土地に詳しいわけでもないのにアメリカを車で移動し、憧れの作家に会いに行きます。ヨーロッパでは、フロント・ガラスが割れても修理して東西ベルリンの壁も越えるのです。その行動力と軽やかさに圧倒されます。街の人々の生き生きした姿が活写され、こんな留学生活もあるのかと目から鱗が落ちる思いでした。

スラヴ語など日本ではマイナーな言語についてなど、とても興味深かったです。ハイネの詩は独語

であるからこそ意味をなし、仏語、英語では別物になる。日本ではバイリンガルは良い意味で用いられるが、海外では貧しい移民の象徴で見下された概念という。多言語社会であるアメリカでさまざまな言語を操り人と交流する喜びを、その背後にある歴史や文化を考察しながら軽やかに楽しく描写していて、少なくともかつてのアメリカは多様な文化を受け入れる度量や、大らかさが残っていたのだと思います。

ウクライナが確固とした民族意識を持った人たちであることとか、ヨハネ・パウロ2世がポーランド出身の初の教皇として就任した話とか、現在のウクライナ戦争や、フランシスコ教皇逝去の話とリンクして、現代とつながりました。

えっ、こんな人たちとも交流があったの？ という方も出てきます。有名な人では日本文学専攻のロバート・キャンベル。ハーバード大学の同窓で、東大で国文学を教え、国文学研究資料館の館長を務めました。ハーバード大学が果たしてきた役割を失ってはならないと思います。

トランプ政権の独断的な政治で、自由であるべき学術研究の世界は、ハーバード大学を筆頭としてどうなるのだろう。あとがきに引かれていた旧知の亡命ロシア人のことば「これから四年の間に根絶やしにされてしまうほど、アメリカの知的制度はやわじゃないさ」に希望を持ちたい。(樋口みな子、会員)

(『銀河通信』246: 2025.7\* より転載)

『ロシア文学を学びにアメリカへ?』は、その野心溢れるユニークなタイトルに心惹かれるものがある。“ロシア文学を学びに行くのなら、本家本元のロシアへ”というのが王道なのだろうが、筆者はその選択はしなかった。というより、筆者にはその選択肢は無かったのだ。

時は、1980年代前半。東西冷戦による激しいイデオロギー対立が続く中、当時のソビエト連邦に日本から渡り、ロシア語やロシア文学の研究のために正規留学する事も困難であり、ましてや、筆者の関心の深い反体制作家やソ連からの亡命作家(ソルジェニツィンやナボコフ、プロツキー)の作品はソ連国内では発禁処分の対象となり、ソ連に留学しロシア文学を研究する門戸は閉ざされかけてしまう…そんな中、筆者の中にひらめいたのが「ロシア文学を学びに、アメリカへ」留学するという道だった。

アメリカに留学すべく、フルブライト奨学金の選考面接を受けた筆者…「ロシア東欧文学を中心としながら、亡命文学やアメリカや日本の文学も視野に入れる」という研究計画を発表し、これに関心を寄せた評論家の江藤淳氏との出逢いに運を加勢され、フルブライト奨学金を得、ハーバード大学のスラブ語スラブ文学科博士課程への留学の道が拓かれた。

太平洋を渡り筆者が最初に踏んだ地は、アメリカ大陸の東端・ニューヨークのマンハッタンであった。「人類のつぼ」「サラダ・ボール」と形容され、世界各地からの種々多様なバックグラウンドを持つ人種や民族の人々を受け入れ続けるニューヨークという都市を筆者自身は「人種の Patchwork」(パッチワーク=つぎはぎ細工)と形容する。

マンハッタンからブルックリンに定住の地を移して根を下ろし始め、多種多様な人種の人々、言語、文化が行き交う中で、ブルックリンの街の一角に**ブライトン・ビーチ**というロシア系ユダヤ人の住むエリアを見つける。ロシア語を学んでいた筆者は、この

エリアに住む人々の話すクロアチア語を聴き、同じスラブ言語の単語の響きに親しみを覚え、次第に、このエリアに住むユーゴスラヴィアにルーツがある人々と英語を使いながら、彼らのコミュニティの中に入ってゆく。

さらに、筆者の探求は、これだけにとどまらない。この地に住むロシア系ユダヤ人の人々の話す共通言語の**イディッシュ語**を学び、そこから見えてくるイディッシュ語の世界の中に、このアメリカの地に息づくユダヤの人々の作り上げる文化の足跡や、ロシア語や英語との接触の中で、イディッシュ語がどのようなアイデンティティを確立していったのかをたどってゆく…。

アメリカに留学した筆者は、言語の世界という**内的世界の探求**にとどまらず、アメリカ大陸の各地に出掛けてゆく**外的世界の探求**にも行動領域を広げてゆく。旅先のインディアナ州に**ポーランド**を発見する。**ワルシャワ**と名付けられた、その小さな田舎町は、ポーランドからの移民が移り住んだという背景から、アメリカに存在しながら、ポーランドの由来を持つに至った由縁を知るに至る。

探険・探求するとは、自らの足で外に出掛け、生きた実態に触れるという**外的世界の探求**であるとともに、**言語**のように、その地に息づく実態を探ってゆく**内的世界の探求**でもあるのだと深く感じさせてくれる一冊である。そして、それらの内的・外的探求を通して**自分とは一体どんな存在であるか**を確かめるに至るのだと教えてくれる一冊である。

(小池敏大、会員、岐阜県高山市)

遠く遡る一九八八年の筑摩書房から『屋根の上のバイリンガル』初刊行の折、私事ながら、湘南から小樽の地に移住した(三千枚のレコードと一万冊余の蔵書と共に。思えば、この一万冊余の中に沼野充義著作が既に何冊か潜んでいる。長い沼野充義フリークと言って憚らない)。

まさに恍惚と不安の昂揚期の只中だったので、新天地に身を置いての心身の心躍り、躍動! という共通項が新鮮で、「屋根の上のバイリンガル」というユーモラスな表題からも、沼野充義が屈託なく、言語から言語に風のように亘るヴァイオリンを、地球の屋根に座ってジョゼフ・スタインの演出なしに、のびやかに弾きつづける様が、本からありあり立ち昇って、新しい地で新しい生を探っていた私をどれほど優しく鼓舞したか知れない。

次の白水社 U ブック版も当然購めているので、中公文庫版はまず増補の「ハーバード生活から、

三つのエピソード」の頁を繰った。ヤコブソンが「君に教授が務まるか?」とナボコフを強硬に排斥したという逸話他が取りあげられている。「ユー・アー・ラッキー!」「人生で一番美味しかった煙草」の二作も卓抜のエッセイで相も変わらぬ艶やかさだ。

二〇二五年のあとがきの筆致の流麗は、一九八八年の筑摩版の初々しくも梅檀(センダン)既に双葉より芳しかった本文の飄逸精緻を、その後の三十七年の歳月がさらに磨きあげて、読者の胸に優しい取捨馴致をもたらすものだ。その文章の精度の豊潤。たとえばナボコフを追い落としたヤコブソンにしても、

エッセイの最後に、狷介な学者として糾弾するのではなく「ぼくは内心自分のことをヤコブソンの孫弟子だと、ちょっと誇らしく思うことにしている」と穏やかに締め括っている。その文章作法の優雅。沼野充義の書くものは奔放闊達でありながら万遍なくその気配りが潤澤に行届いていて温かい。それは半世紀変わらない沼野文学の揺るがないセオリーだ。

さてこのたびの増補版の三篇への手放しの賞賛はさておいて、一九八八年、九六年の刊行時にあれほどバズった本文本篇の魅惑的エッセイに触れよう。この『ロシア文学を学びにアメリカへ?』はこれまで私達が手に取って眼にしている数多の作家達の身辺留学記とは、その趣きを全く異(こと)にしている。まさに「言葉」をその中軸に据えて一步も日常身辺小説の安易に流されていない。ロシア語は無論のこと、欧米語、東欧語への果敢な挑戦は読み進めて小気味よく快い。

とりわけポーランド語への傾注は著しい。本篇二十八章の中の五分の一以上の章が「ポーランド!」に拘泥して費やされている。アメリカには五百万人以上(二〇二一年のある統計によれば八百八十一万人)のポーランド系の人口があって、彼らのもたらしたポーランド語の固有名詞の数々は確実にアメリカ英語の一部になっているのである(「アメリカの中のポーランド」から引用)ということなら、それは必然とも言えるのかもしれない。としても、沼野充義のポーランド愛、量り難いほどに深い。ワルシャワという名前の街がアメリカのインディアナ、イリノイ、ケンタッキー、ミズーリ、ニューヨーク、オハイオ、ヴァージニア各州にあることを知ったのも、沼野の著作によってだった。

さらに瞠目するのは「シカゴ!」だ。その中心部から北西に広がるミルウォーキー通りには巨大なポーランド人街があり、その人口、五十万とも七十五万とも言われ、その居住区域に足を踏み入れるとポーランド語ばかりが聞こえてくる——というトリビアも、私はこの本から得た。シカゴは首都ワルシャワに次ぐポーランド系人民人口とも知った。以降、マイケル・ジョーダンの活躍したシカゴ・ブルズ黄金期にも、映画『シカゴ』のアカデミー賞受賞時にも、私の脳裏に強く蘇ったのは、この「ワルシャワからシカゴへ」だった。淡々と描かれながら、強い衝迫を得た章だった。カフカ『アメリカ』のカール・ロスマン少年のストーリーそのまま、迫害を受けたポーランド人の求めた新天地が「シカゴ!」だったに相違ない。

新版の「がんばれイディッシュ語」は、このたびさらに補論が付加されて、胸踊る興味深さだった。「イディッシュ」への沼野の熱が今再び本文以上の濃厚、濃密さで伝わってくる。ドイツ語方言として取り扱われがちだが、イディッシュはまさにユダヤ語であり、東欧ユダヤ人の母語であると断じている。潔い断定に胸が熱くなる。特筆すべき章と思う。

類い稀なポリグロット沼野充義の、彼にしか書き得ない言葉のヴァイオリン旋律に、是非耳傾けて欲しいと熱望する。けだし名エッセイである。

蛇足ながら、今、私は沼野充義・恭子夫妻の編訳、現代ロシア小説傑作選『ヌマヌマ』(河出書房新社 2021.10)にもはまって抜けだせずにいる。これも加えて推したい。怖るべしヌマ! ヌマ!

(文中敬称略)

(長屋のり子、詩人、会員)



新刊  
紹介

## 『いまは、ここがぼくたちの家：

### ウクライナから戦争を逃れてきた子ども』

バルバラ・ガヴリルク(文) マチェイ・シマノヴィチ(絵)

田村和子(訳)

彩流社 2024.12



本書を読んで、私は自分の子ども時代を思い出しました。主人公のローマン君が、故郷のウクライナでの戦争の恐怖に加えて、避難先のポーランドで、レッテルを貼られて、どうせ言葉が分からないだろうとクラスメイトからいじられるのは、避難してきた子どもたちにとって絶望でしかないでしょう。気持ちが追い詰められてしまいます。

私は父の仕事の関係で全国を転々としました。具体的には、兵庫県、大阪府、愛知県、東京都、千葉県、そして北海道で暮らしています。また、社会人になってからは、マレーシアとシンガポールに14年間住みました。移動を繰り返したことで、その地域の文化や習慣を知り、考え方の違いに気付く

ことができたので、今は転校に感謝しています。しかし、苦労も多くて大変でした。

まず、レッテル張りに苦労しました。私は小学4年生のとき、1980年初頭に兵庫県の宝塚市から札幌市に転校してきたのですが、当時は漫オブームでした。そのため、転校した小学校のクラスでは

「関西人は漫才師のようなものだ」と思っている生徒が少なからずいました。だから「面白いことを言うヤツではないか?」と期待されたのですが、それが辛かったです。また、B&Bの島田洋七さんの「めっちゃめっちゃ陰気やでえ〜!」が爆発的に流行っていたため、私にもその口調と振りをするように強要する生徒がいました。今であれば「めっちゃめっちゃ陰気やでえ〜!」とご本人のように腰を振ってやれると思います。しかし、北海道に来たばかりで、友だちと別れた悲しみを引き摺っていた私は、この美味しいレッテルを上手く利用できませんでした。

次に、表現方法の違いに苦労しました。「捨てる」ことを関西では「ほかす」と言います。一方で、札幌では「投げる」と言うと思います。だから掃除の時間にクラスメイトからゴミ箱を渡されて「このゴミを投げて!」と言われたとき、私は驚きしばらく呆けていま

た。「何やってんの、早く投げてきてよ!」と促されたので、「ホンマに、ええの…?」と戸惑いながらゴミ箱を抱えて中のゴミを一気にぶちまけました。今度はクラスメイトたちが驚き呆けていました。漫才師のように面白くもなく、また指示が通らない私の立場が一層不利になったのは言うまでもありません。この出来事がきっかけとなって、私は「北海道の言葉が分からないとても困った人」として、何についてもやたら細かく説明されるようになりました。その状況を回復するため、私は関西弁を封印して「投げる」「こわい」「したっけ」などの北海道の特有な表現を過剰に使うことで道民化できていることをアピールするようにしました。

今後は日本も外国人を積極的に受け入れていくはずなので、私も共感力を鍛え、外国の子どもにも寄り添ってあげられるようになりたいものです。

(齊藤賢人、会員)



## 敦賀における人間性のレッスン

シルヴィア・オレーヤージュ & 佐藤レミリア



「人道の港」敦賀ミュージアムの静かな展示室で、3人のポーランド系日本人の子どもたちが黙って見入っています。彼らの目は色褪せたモノクロ写真に注がれています。その中には、まるで自分たちに似た、100年前のポーランド人の子どもたちが写っています。写真の子どもたちの表情には、苦しい体験の跡と、わずかな希望のきらめきが映し出されています。

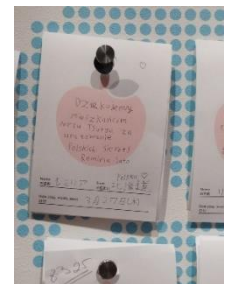
それは「ポーランド・シベリアの孤児たち」—— 戦争と革命によるロシアの混乱の中で孤児となり、孤独と絶望に打ちひしがれていた子どもたちです。ウラジオストクでポーランド極東児童救済委員会を設立し中心となったアンナ・ピエルキェヴィチという勇敢なポーランド人女性は、ポーランドの孤児たちを決して忘れさせませんでした。彼女の必死の助けを求め、すべての子どもたちのための母の叫びは世界に響き渡りました。

そして、日本がそれに応えたのです! 日本赤十字社と敦賀の一般市民は、心と家を開きました。ただの避難所ではなく、人間性そのものを差し出したのです。子どもたちは温かいお風呂、清潔な服、栄養ある食事を受けました。日本の子どもたちは自然と、飢えたポーランドの仲間のみずみずしく甘い赤いリンゴを持ち寄りました。しかし何よりも、見知らぬ異国の地で、異なる言語と完全に違う文化の中で、子どもたちは優しさと笑顔を受け取ったのです。体と心の傷を癒すほどの繊細な気遣いに包まれた孤児たちは、やがてポーランドへの長い帰路に就きました。

敦賀ミュージアムに立つポーランド系日本人の子どもたちは、深い教訓を受け取っています。それは「思いやりには国境も時代も政治も関係ない」ということ。「大きな苦しみの前では、一つの人間的な行動が数百人の運命を変え得る」ということ。ポーランドと日本の絆は、単なる政治や経済関係ではなく、深い共感の記憶に刻まれていることを、子どもたちは目の当たりにします。

ポーランド系日本人の子どもたちの目に浮かぶ涙は、当時の孤児への同情だけでなく、深い感謝の涙でもあります。どれほど暗い時代にも善意という光が灯せること、それは世代も大陸も越えて伝わる温もりになることを、子どもたちは学びます。敦賀の物語は、私たちが皆ひとつの人間家族であり、互いに無償で助け合うことこそが最も高貴な使命であり贈り物であると、時代を越えて思い起こさせてくれるのです。

(Sylwia Olejarz, 北海道医療大学 & Remiria Sato)





### 私の愛するポーランド映画

ポーランド映画を初めて見たのは、中学生の時、午後の洋画劇場でたまたまやっていた昔のポーランド映画だった。一人の男と店にいる女性は何やら話している。後半、男は政治的理由で追われていて、おしまいには銃で撃たれて野垂れ死にする。それが干し物とゴミの山のようなところで、無様に死んでゆくのだ。衝撃的だった。白黒の映画で、題名は『灰とダイヤモンド』(1958)だった。鮮烈な記憶に残っていたのだが、それがアンジェイ・ワイダの1959年度ヴェネツィア国際映画祭、国際批評家連盟賞を受賞した出世作だと知ったのは、ずっと後になってからだ。しかも、アンジェイ・ワイダが特権的な固有名詞であることも、主演俳優ズビグニエフ・チブルスキーがポーランド映画にとって神話的固有名詞であることも知らなかった。にもかかわらず、その白黒の小さなブラウン管に映し



出された映像の記憶は今日に至るも鮮烈である。私がポーランド映画に改めて出会うのは、1979年の新宿の映画館である。ワイダの名前は憶えていたと思うが、『地下水道』(1957)とポランスキの『水の中のナイフ』(1962)だった。これらの映画も鮮烈な体験をもたらしてくれた。『地下水道』の白黒の画面の中、地下水道の中を歩き回るレジスタンスの人々の絶望的な闘いを描いた映画には痺れたし、『水の中のナイフ』の新鮮な息吹きには率直に感動した。特に指の間にナイフを立てて遊ぶ若者の無軌道さに、新たな世代の躍動を感じざるをえなかった。そして、何よりも音楽のクシシュトフ・コメダのモダン・ジャズの鮮やかな音響に心酔した。私の愛するポーランドの映画監督たち、アンジェイ・ムンク、イエジー・スコリモフスキ、ロマン・ポランスキ、イエジー・カヴァレロヴィッチ、アンジェイ・ワイダ、クシシュトフ・ケシロフスキ… 挙げればきりが無い。(坂尻昌平、映画研究者、札幌大谷大学非常勤講師)



**ご寄付 (2025.4-7) 深謝!**

(1口千円) (3) 田村和子、溝口尚美 (2) 小山内道子 (1.5) 本間公平 (1) 三上和子 (敬称略)

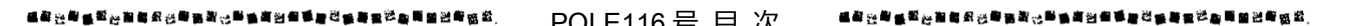
**年会費 (2025.9-26.8) 納入のお願い**

新年度会費の納入をよろしくお願い申し上げます。

年会費: 一般3,000円、学生1,500円 また、維持会費としてご寄付(1口千円:任意)も承ります。

※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください

- ◆ゆうちょ銀行振替口座【記号】02740 5【番号】19735【加入者名】北海道ポーランド文化協会 (他銀行から送金の場合) 店番(279) 預金種目(当座) 店名(二七九[ニナナキユウ]店) 口座番号(0019735)
  - ◇北洋銀行(本店営業部) 普通預金口座【店番号】028【口座番号】0605084【名義】ホッカイドウポーランドペンカキョウカイ ※「北洋銀行アプリ」を利用すれば、北洋銀行口座間の送金手数料は無料
- ※遠方の方はご寄付(年1,500円)で会誌 POLE の定期読者になることもできます。事務局にお問い合わせください



### POLE116号目次

10/13(月・祝) 中島公園内の豊平館で 定例総会と午後のポエジア を開催します! ..... 1

日本での2週間: プロニスワフ・ピウスツキとアイヌの足跡をたどって(M・バサイ、J・ロドヴィッチ=チェホフスカ) ..... 2

《第116回例会》報告 講演&上映「ポーランドと日本: 新渡戸稲造とポーランドの偉人たち」(安藤厚) ..... 3

ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」を慕って(門間巖) ..... 5

《第115回例会》報告 ポーランド名作映画ビデオ鑑賞『水の上のナイフ』(池田光良、坂尻昌平) ..... 7

〈新会員のひと言〉エロシエンコ、エスペラント、ポーランド(引田秋生) そばかす先生のふしぎな学校(住谷秀保) ..... 8

「若きポーランド」の息吹(田村和子) ..... 9

〈新刊紹介〉若きポーランド 手がかり(小池敏大) クラクフ・ゲッターの薬局(小篠真琴) ソラリス: コミックス(宮風耕治) ロシア文学を学びにアメリカへ? 増補版 屋根の上のバイリンガル(樋口みな子、小池敏大、長屋のり子) ..... 10

いまは、ここがぼくたちの家(齊藤賢人) ..... 10

敦賀における人間性のレッスン(シルヴィア・オレーヤージュ&佐藤レミア) ..... 15

〈新会員のひと言〉私の愛するポーランド映画(坂尻昌平) ..... 16

	発行 北海道ポーランド文化協会		ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方		安藤厚/池田光良
	TEL・FAX 011-556-8834, mail: hokkaidopolandca@gmail.com		熊谷敬子/越野誠
	東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付		
	TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058		

Table of Contents

Announcement: 39 <sup>th</sup> Annual meeting and "Afternoon Poesia" at Hoheikan on October 13 <sup>th</sup>	1
Two Weeks in Japan: Following the Footsteps of Bronisław Piłsudski and the Ainu (M. Basaj, J. Rodowicz-Czechowska)	2
Report: Lecture & video viewing "Poland and Japan: Inazo Nitobe and great people of Poland" (A. Ando)	3
In love with the Śląsk Song and Dance Ensemble (I. Monma)	6
Report: Video viewing "Knife on the Water" by Roman Polanski (M. Ikeda, S. Sakajiri)	7
New members' messages: Eroshenko, Esperanto, and Poland (A. Hikita) / J. Brzechwa's "Akademia pana Kleksa" (H. Sumiya)	8
The Breath of the "Young Poland" (K. Tamura)	9
Book Review: "Young Poland: A Clue" by T. Sekiguchi (T. Koike) / "Apteka w getcie krakowskim" by T. Pankiewicz (M. Koshino) / S. Lem's "Solaris": Comics by T. Moriizumi (K. Miyakaze) / Traveling to America to study Russian literature?: Expanded edition "Bilingual on the roof" by M. Numano (M. Higuchi, T. Koike, N. Nagaya) "Teraz tu jest nasz dom" by B. Gawryluk (K. Saito)	10
Humanity lessons at Tsuruga Museum (S. Olejarz & R. Sato)	15
New member's message: My beloved Polish films (S. Sakajiri)	16